

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390100297		
法人名	株式会社ヴィーヴル		
事業所名	グループハウスあい		
所在地	熊本市南区田迎1丁目7-20		
自己評価作成日	令和4年3月9日	評価結果市町村受理日	令和4年4月25日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai gokensaku.mhlw.go.jp/43/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	令和4年3月22日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

お客様一人一人の「らしさ」を大切に、その方のペースに合わせた暮らしを目標にしている。また職員とお客様が家族のように、日常生活の中で気を使うことなく暮らせるような雰囲気作りを心掛けている。
 コロナ禍の中でもご家族との繋がりが切れないう、面会への工夫も行っている。(玄関の飛沫防止シート・タブレット・ベランダでのフェンス越し等)
 看護師による医療との連携・24時間対応と、状態変化時にもすぐに対応できる体制をとっている。お客様やご家族はもとより、スタッフにも安心して過ごしてもらえるようにしている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

熊本市中心部に近いホームは、ショッピングセンターや飲食店をはじめクリニックや学校など生活の拠点となる環境で高層マンションに囲まれながらも、花き栽培のハウスや昔ながらの母屋などが残る一角に建っている。上り框の玄関に迎えられると、入居者と職員がゆっくり過ごす姿に日常の支援の様子が伝わってくる。コロナ感染症への対応から面会を控えている家族に代わって、これまで以上に寄り添いながら入居者の思いを引き出し、主治医や看護師と医療連携を図りながら入居者の健康管理に努めている。家族は職員が生き生きと業務にあたる姿やアットホームな雰囲気、入居者の穏やかな表情に信頼と感謝を寄せられている。職員自身も働きやすい職場環境に感謝し、ホームに入居された方全員の最終までを支援させていただきたいとしている。今後は運営推進会議を通して行政、地域とのパイプ役として尽力されることが期待される。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	玄関に掲げており、朝出勤時黙読するようにしている。また、毎年新年度の職員会議で代表より理念についての説明があり、共有している。	法人理念とホームの運営理念を目に付く所に掲示して、黙読してケアに入るようにしている。入職者には理念を通じて、その人らしい毎日を過ごしてもらおうことや、運営推進会議で地域へ向けホームの姿勢を伝えている。毎月のミーティングで理念に立ち返るとともに、職員は半年ごとに個人目標を自己評価し、ケアの振り返りを行っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	現在コロナ渦の中以前のように交流は頻回には行えていないが、小学校や地域サロン等積極的に参加している。認知症カフェもコロナ開け再開予定。	コロナ感染症の状況を見ながら地域のサロンに参加し、認知症の啓発活動を通して地元小学校との交流を継続している。法人が開催する“一期カフェ”(いちごカフェ)は、一期一会から名付けられ、現在は中断しているものの地域から再開の声があがっている。	感染症終息後のカフェの開催に向け、地域への情報発信を期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症カフェの開催の他、いきいきサロンや小学校で講義をさせていただいている。また、徘徊模擬訓練へも参加している。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2月に1回開催していたが、コロナ渦のため今期は12月しか開催できていない。他は書類にて報告している。	昨年12月には1年半ぶりに通常開催が出来ており、社協や地域代表者と直接顔を合わせ、情報発信の貴重な機会となっている。コロナ禍により地域交流の機会が減少していることや、サロンの開催時には是非参加したいなどの意見があがっている。資料送付にて開催する際には、入居者の現状や事故、職員研修について報告している。	推進会議資料は家族にも送付することで、情報発信の機会が少ない現在、ホームの取組を伝える良い機会になると思われる。検討願いたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営上の質問は質問票にて行っている。包括担当者とはホームの空き状況等や地域の情報等の連絡を取り合っている。	管理者は職員の人員配置や感染症について行政と連絡を取り、疑問や質問などに応じてもらい、良好な関係を継続している。コロナ禍以前には運営推進会議を入居者のいるリビングで開催しており、参加者にホームの状況を直接見てもらうことで、現状把握が出来ており、地域交流への助言や入退居の情報交換などが行われている。	推進会議資料は家族にも送付することで、情報発信の機会が少ない現在、ホームの取組を伝える良い機会になると思われる。検討願いたい。
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	年2回以上身体拘束廃止に関する指針の勉強会を開催している。また、ケアカンファレンス時に不適切なケアが行われていないか話し合うようにしている。	職員は法人の全体研修やカンファレンス後の勉強会で身体拘束について認識を深めている。人感センサーを玄関と2か所の居室に使用しているが、家族への説明及び同意を得、継続するにあたっては途中経過を説明している。法人の定例会議で各部署の管理者が気になる点を話し合い、ストレスチェックを通じて職員のメンタルに配慮した運営に努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	上記勉強会の他に虐待防止関連法の勉強会も行っている。毎月権利擁護委員会も開催され、事業所内での虐待の防止に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	上記勉強会と共に権利擁護についても勉強をしている。また、外部で行われる研修等にも参加するようにしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約書類受け取り時疑問点を必ず確認している。法改定時は事前に電話連絡をし、その後書類を送付している。書類確認後疑問点を確認している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見箱を玄関に設置している。 また、職員が日頃より面会時に近況報告と家族の思いを聞くようにし、小さな愚痴でもすぐ改善できるように取り組んでいる。	面会時やホーム誌で入居者の近況を伝え、安心してもらうようにしており、意見や要望も直接伝えられるようである。職員は出された内容を共有し、改善に向けて取り組んでおり、要望のみならず感謝の言葉も寄せられている。入居者の要望は普段の関わりの中から収集し、支援に反映させている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ケアカンファレンス後ミーティングを行い、会社の運営に関して報告している。意見など言いやすいよう、日頃より雰囲気作りを心掛けている。	職員が日頃から意見や要望を出しやすい雰囲気づくりに努めている。出された意見はミーティングで話し合い、必要によって代表者に声をあげている。個別にゆっくりと話を聞く機会として個人面談を年2回設けており、職員意見を吸い上げるようにしている。	職員の気づきをヒヤリハットとしてすぐに記録する仕組みや、夜勤専従者との連携など入居者支援に反映されており、危機管理の一つとして継続されることが期待される。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年2回人事考課表を用いて評価を行い、職員の状況を把握している。面接も行い、思いや不満等を聞き、必要な時は代表と話したり、経営会議で話し合ったり、改善に取り組んでいる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	力量表を用いて自己評価・他己評価を行い、その格差をお互い理解し、何を学んでいけばよいか話し合っている。それに合った研修等も紹介している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域で行われる研修や発表の場には積極的に参加するようにしている。また地域密着型連絡協議会に入会し、様々な情報や他施設との交流をもつようにしている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前訪問と他関係事業所への聞き取りを行い、基本情報を確認し、職員間で共有している。家族や本人の不安や要望を細かく確認するようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居申し込み前に見学していただくようにしている。当事業所の理念やサービスの内容を説明し、困っていることや不安に思っていることなどお聞きするようになっている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	事前情報や見学時のお話により、家族・本人がどのようなサービスを求められているか確認し、求められているサービスが他にある場合は紹介するようになっている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	自立支援を念頭に置き、できないことへの支援を心掛けている。一緒に行っていたことによって、暮らしを共にする一員としての関係を築くようになっている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族へは状況をまめに報告するようになっている。コロナ渦のため行事等への参加はしていただいているが、面会が少しでもできるよう工夫している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	面会・電話・手紙などできる限り継続してもらえるよう支援している。	面会方法を変更したり、家族からの電話で元気になってもらいながらコロナ禍での関わりを支援している。ラッキョや梅を使った保存食作りに入居者の知恵が活かされ、全員揃っての活動が難しい場合は、個別にできることを検討し、その方にとって馴染みの新聞読みなどを見守っている。感染症の状況を見ながら自宅への一時帰宅もできている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者の生活や状態に応じて席などを考え、利用者同士で会話が可能な職員のかかわり方をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービスを修了したご家族に対しても、会社の行事への招待状やお便りを出すようにしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ICFシートを活用し、本人の思いや希望・必要なケアを考えている。また、日頃の会話のなかから本人の希望や思いを察知し、共有するようにしている。	ICFシートを使って入居者の心身の状況や活動、人的、物的環境などを評価検討し、入居者の思いを会話から引き出し、表現困難な方には表情やこれまでの生活の様子からくみ取り、ケアに反映させている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前に情報収集し、どのように生活してきたか、安心して今までのように生活するにはどうしたらよいかを話し合う機会を作っている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の個人記録に心身の状況やその時の表情や言動を記録し、なにができるか、なにを必要としているかケアカンファ時話し合っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアカンファレンス時には担当者を中心にそれぞれの意見を積極的に出し合うようにしている。家族の参加はなかなか難しいが、事前に要望等確認している。	入居者・家族の意向を優先したプランを立案し、モニタリングには担当職員が関わっている。3か月ごとに評価して新たにプランを作成し、現状に沿った内容としている。入居当初にはこれまでの情報やICFシートから入居者の行動やできること、できないことを見極めできることで自信をもってもらうようにしている。また、他者との関わりやレクリエーションの参加により、徐々にホーム生活に馴染んでもらうような支援をあげている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	総合記録ではすぐに日々の状態が分かるようにしている。個人記録には言動を中心にその時の心理状態が分かるようにし、どのようなケアを行ったか、職員が変わっても同じようにケアできるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	他者との交流・社会性の維持・リハビリを目的として、法人内のデイを可能時利用したり、医療支援が必要などときには訪問看護を利用するなどして必要なサービスが受けられるようにしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	近くの公園や公民館などで行われる催しにはできる限り参加するようにしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	今までのかかりつけ医への受診を推奨しているが、本人の状態や家族の希望に応じて往診の紹介も行っている。緊急時には受診の付き添いも行っている。家族、主治医と情報を共有し、適切な医療が受けられるようにしている。	入居時にこれまでのかかりつけ医の継続を推奨しているが、受診外出が難しくなられた方は、訪問診療に変更されている。現在、殆どの方が協力医療機関による2週間に1回の訪問診療や、家族と定期受診に出られる方もおられ、書面や直接電話で職員が状況を伝えている。また、協力歯科医による月1~2回の訪問時に、必要な治療を受けられる方や週1回歯科衛生士による口腔ケアも行われている。職員は適切な歯ブラシ(歯間や舌ブラシも含め)について歯科衛生士に相談を行い、日頃のケアに活かしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日々のケアの中で医療的問題が発生した場合、看護師不在でもすぐに連絡が取れるようにしている。また他部署の看護師の協力が得られるよう、利用者の情報を報告している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には定期的に病院や家族と連絡を取り、家族の意向を確認しながら、早期退院に向けて支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることができることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に必ず緊急時や重度化した場合の対応について確認している。また看取りの指針の説明を行い、状態変化時にはその都度主治医・家族と再確認している。家族・本人の以降に添った終末期が迎えられるように支援している。	入居時に看取り支援に関する指針をもとに説明を行い、意志確認書への記入を受けている。確認書についてはいつでも変更が可能であることも申し添えている。職員はホームに入居された方は、全員ホームで見送りたいとしており、主治医や訪問看護と連携しながら、日常の健康管理を大切にしている。看取り支援ではなく急変で、医療機関で最期を迎えられた方にも、本人を偲びながらカンファレンスが開催されている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	日頃のケアの中で看護師が緊急時や事故時の対応方法を指導している。また会社で緊急蘇生法の勉強会も行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防災マニュアルを職員がいつでも確認できるようにしている。コロナ渦で開催できていないが、火災訓練2回/年 水害訓練1回/年行っている。緊急時地域の方にも協力していただけるよう、運営推進会議等でお願している。	今年度は火災の机上訓練を1回実施し、2日目はコロナの影響もあり4月に予定している。水害訓練では、職員が入居者の代役をして2階に垂直避難する訓練を実施している。訓練後、防災委員を中心に反省会を実施した際、実際入居者が避難をすることが重要であるなどの意見が出されている。日頃の安全チェックとして、防災・安全に係る事業所自主点検チェックシートや「火気関係」自主検査チェック表(終業時毎日)、「閉鎖障害」自主点検チェック表(毎日始業・終業時2回実施)など細かく取り組んでいる。災害備蓄はリストをもとに確保されている。	今後は運営推進会議を活用した訓練の実施や、近隣地域との協力体制の継続に期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	否定的な言葉を使わず、本人を尊重した丁寧な声掛けを心掛けている。その方に合った声掛け、職員によってバラバラにならないよう統一した声掛けを心掛けている。	入居者への対応は尊厳を持ち、否定しない言葉について掲示し、常に課題とし共有に努めている。呼称は家族にも要望を聞いたり、これまでの呼ばれ方などを確認し、対応している。同性介助については、話を聞きながら希望に応じている。職員の守秘義務については研修会などで周知徹底を図り、写真の掲載など個人情報の使用については、本人・家族の了承を得ている。施設とホームの玄関に置かれた面会記録簿は個別記入とされている。	ゆっくりとその方のペースで会話する姿は他の入居者にとっても安心できるものと思われる。変わらぬ支援に期待したい。また、居室への入室は在室の有無にかかわらず、声掛けやノックの徹底が期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ゆっくりと一対一でお話する時間を作るようにしている。その日の状態に合わせて声掛けの仕方を工夫している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ある程度の時間は決めているが、本人の意向やその日の状態に合わせて支援するようにしている		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	以前から好まれていた格好(洋服や髪形など)えお確認し、できる限り同じようにしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	本人や家族からお好きなメニューを聞いて取り入れるようにしている。できる方には一緒に準備や片付けを手伝っていただいている。	入居者の好みを取り入れながら食材(米・精肉・鮮魚など)は専門店を中心にこだわりを持って購入されている。行事食は特に季節感に配慮しており、配達業者(市場)からの旬の食材についてのアドバイスを生かしている。現在、朝と夕はホームで、昼食は法人厨房で調理されたものを提供しているが、今後は業者の料理も活用しながらホーム内調理にしていきたいとしている。入居者は肉を要望される方も多く、ケチャップやソースなどの調味料も好みで用意している。また、見た目にも楽しめるよう食材やメニューに応じてミキサーやきざみ食を準備している。入居者は準備や片付けなど出来ることを手伝われており、家族がエプロンを準備されている方もおられる。	入居者は必要な支援を受けながらゆっくりと昼食を摂られており、美味しいお茶の提供も食事をより楽しみなものにしていると思われる。現在、職員は持参した弁当などを食べているが、検食を兼ねて1名でも同じものを食べ、入居者の代弁者としての意見を反映されることを期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	1日の食事量や水分量は必ずチェックしている。その方に必要な量が摂取できているかすぐ分かるようにし、不足を補うようにしている。高カロリー飲み物等も準備し、食事量が少ないときなどすぐ対応できるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後は口腔内に食残がないようがいている。夕食後の口腔ケアは時間をかけるようにしている。訪問歯科1～2回/月 衛生士による口腔ケア1回/週 その中でケアの方法などの指導ももらっている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	日勤帯では尿意がない方でも必ずトイレに座っていただくようにしている。その方のトイレへのサインや排尿パターンを観察し見過ごさないようにしている。	日中はトイレでの排泄を支援しており、殆どがリハビリパンツを使用しておられるが、布パンツ(パット併用もあり)で過ごす方もおられる。ホーム内には4か所トイレが設けてあり、自立の方は自分の部屋の近くや、リビングで過ごされる間は、その近くなど時間帯や慣れた場所を使用されている。夜間も自立の方やポータブルトイレ、パット交換など個々に応じて支援している。ポータブルトイレは臭気など無いよう清潔に管理している。	入居者の中には汚れることを好まれず、布ではなくリハビリパンツを使用される方もおられるようである。入居者の思いをくみ取りながら個々に応じた排泄支援が継続されることを期待したい。
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	ビフィズス菌入りの発酵乳を毎朝飲んでいただいている。便秘解消に良いとされている食品も多く取り入れるようにしている。適度な運動、できない方はマッサージなど行うようにしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	2日置きの入浴を基本とし、その方の希望や体調を観察しながら調整している。特に入浴時間は決めておらず、可能な限り本人の意思を尊重している。	週2～3回の入浴と、夏場の発汗や汚染時はその都度対応し、不快なく過ごせるよう支援している。また、介護度が高くなっても、リフト浴を使用しながら浴槽に浸かって温まってもらっている。シャンプーなどはホームでも準備しているが、好みの品を個別で用意される方もおられ家族の面会にも繋がっている。季節湯(菖蒲など)を支援する際は、全員が楽しめる間準備し、入浴剤も好まれる方に使用している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	今までの生活習慣をお聞きし、同じように生活していただいている。夜ゆっくり休むことができるよう、昼間の休憩時間や過ごし方を工夫している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬の管理は看護師が行っている。在宅薬剤師にも入っていただき相談や指導がもらえるよう連携をとっている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活歴や趣味などその方合った、またできる楽しみを提供できるようにしている。ビールやコーヒーなどその方の嗜好品を準備している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	近隣への散歩は積極的に行うようにし、季節の変化を感じていただけるようにしている。コロナ渦のため最近遠出はできていないが、家族と一緒にさくらやイチヨウ見学等も行っている。	感染症への対応から以前のようなドライブ外出は控えているが、地域の神社へ歩きや車いすで出かけたり、散歩をしながら隣家に咲く菖蒲やシャクヤクなどの開花は毎年の楽しみとなっている。家族の協力を得た外出として、地域の桜やイチヨウ見学(県庁)、感染症の状況を見ながら自宅への帰省、介護タクシーを利用し法事へ参加された方もおられる。	感染症の終息が見えない現状であり、今後も職員のアイデアを活かし、外出に代わるホーム内の楽しみ事を支援されることを期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	普段金銭は職員が管理している。買い物などの希望時は職員が同伴している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	詰所の電話や携帯を使用して電話できるようにしている。タブレットも購入し面会制限中使用できるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	今や玄関など季節の花を飾ったり、季節に合った壁飾りを飾ったり、季節を感じられるようにしている。落ち着いた雰囲気作りを心掛けている。	上がりかまちの玄関は1軒の家を感じる事が出来る。感染症への対応からこれまで以上に掃除や換気、消毒を徹底しながら、壁面や草花を飾ることで寛げる環境に繋げている。壁面制作は入居者もできる事を一緒に取り組んでおり、訪問当日は満開の桜がリビング内を明るくしていた。室温は入居者に応じて設定しており、冬場は床暖房が使用されている。リビングの席は身体状況や入居者間の相性なども考慮して配置しており、クラシック曲が流れると安心される方や、食後専用の座椅子をリビングに置き、足を伸ばしゆっくりされる方もおられた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	TV前のソファで気の合う方同士でお話したり、ラジカセの前で静かに音楽を聴けるようにしたり、一人掛けのソファでのんびり外を眺めたりできるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時には可能な限りそれまで使っていたものを持ってきていただくようにしている。本人が使いやすく、安全に配慮し居室になるよう心掛けている。	居室の環境作りとして、自宅で使用していたタンスや小物、寝具類、写真など馴染みや必要な品の持ち込みを伝えている。また、職員が写したイベント時の写真を掲示したり、カレンダーは家族による準備や、ホームでもその方の好まれる花や動物などの絵の物を用意している。居室内は物品の配置など安全面への配慮や部屋を迷われる方に、表札や案内カードなど個々に応じて対応している。居室から小学生の登下校時の声が聞こえ、「今、帰りよとだろう～?」「この辺りは何小学校になるとかね～」など、楽しみにされているようである。	これまで夜やすまれている時間を家族に聞き、個々に応じた就寝時間を支援するなど、生活習慣の継続も安心や居心地の良さに繋がっている。現在は面会が制限されており、家族の安心に繋がるような居室内の状況を発信いただきたい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	自室の表札や番号・トイレの表示をおおきくしたり、見えやすいところに表示したり分かりやすいようにしている。また歩行の妨げにならないよう動線に物を置かないようにしている。		